

韓国と日本の伝統農家における空間構成の発展過程やその特性

The characteristics of the space and developmental process with traditional farmhouse
in Korea and Japan

*劉福姫 **田中辰明

Bokhee Yoo、Tatsuaki Tanaka

(*Graduate School of Humanities and Sciences, Human Environmental Science

**Prof. Faculty of Human Life and Environment)

1. 序論

日・韓国は隣国であり当然の事ながら古来からの交流はあった。人的交流があれば住宅もお互いに影響を受けたに違いない。住宅の形態はいつの時代においてもそれぞれの社会現象が反映され、住んでいる人々の生活の要求と住意識によって造られるものである。従って両国の住居は各々の独自性をもつものと考えられる。日本の伝統農家は木造であり、木の柱を建てて、梁でつないでいくしかなかったわけである。これに対して韓国の場合は粘土などで容量を造って中を繰り抜いていくような空間構成である。

本研究は韓国と日本の伝統農家の発展過程や空間構成の特性比較を通じて両国の農家の独自性を追求することを目的とする。これは現代の住居観や住居空間の理解に役に立つと思われ、また各国の独自性をどのように継承し、変換し、創造していくか、という問題を探求していくのが向後の課題である。

2. 研究方法

1) 調査および内容

本研究は現地調査及び文献調査によって行った。一次現地調査は1997年9月に韓国の安東、慶州で、二次は1998年4月に日本の奈良や狛江で行い、観察及び写真撮影による資料を収集した。また、両国の農家における独自性を分析するためには平面の発展、空間構成の背景、両国の独自の空間分析の傾向、空間利用の形態、住居意識、住生活様式などについて文献調査を行った。研究の進行は両国の農家の発展過程を系統的に考察した上で、日常生活に対応した構造的・生活対応的空間構成の特性を比較・分析した。

2) 比較研究の範囲

複数の文化を比較するにはその比較範囲を明らかにしておく必要があり、本研究では次のような範囲の設定を行った。

(1) 時代的な制限

両国にとって外来文化の影響による急激な変化が起きることになった近代に入るまでの農家住宅を対象にする。つまり、江戸時代の末期(19C中期)、韓国は朝鮮時代の末期(19C末期)までの農家を研究対象¹⁾とする。

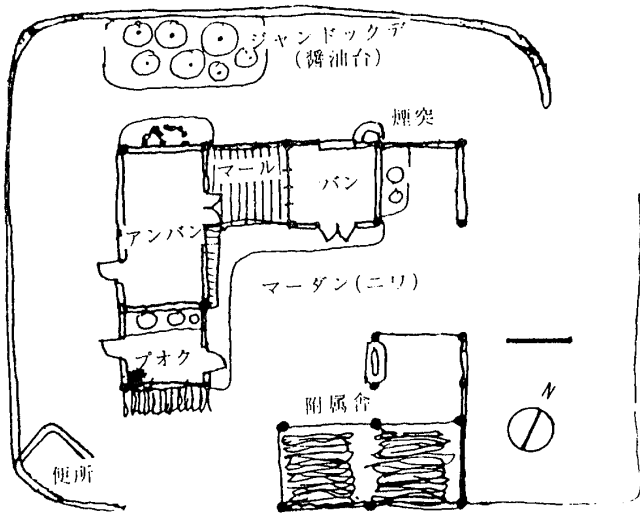
(2) 用語の制限

(1) すまい棟²⁾とは敷地中、居住用と使われる棟として、納屋、倉庫、畜舎などの附属者舎と区別される。「内部空間」とは天井と三面の構造物によって構成されている住生活空間である。つまり、韓国の場合はプオク(炊事場)、マル(板の間、抹樓)バン(部屋、房)であり、日本の場合は土間の部分と広間、座敷、寝間などの床部分である。また、「外部空間」とは敷地の中で、「すまい棟」の外表面構造体や塀などによって囲まれた空間とした。つまり、韓国の場合はマダン(庭)と便所、ジャンドックデ(醬・台)、附属舎などがある空間になり、日本の場合はソトニワ(外庭)に当たる³⁾。

1) 韓国は1876年の開港以来の混乱期を経て1894年に行われた甲午更張はそれまで維持されてきた朝鮮の政治・経済・社会の各方面に及ぶ大改革が行われた。

2) 本論では日本の農家の場合、床の空間と土間の空間が一つの棟で構成された農家を研究対象とした。地域によって農作業の空間が別棟あるいは母屋に接して建てられていることもある。しかしこれは本研究には分析対象(定型)から除くことにする。一方、韓国の場合すまい棟と農作業などが行っている1-2の附属棟と離れて構成されている場合が多く、この附属棟は農器具などを保管する倉庫系列、畜舎系列、便所系列のように別の室で構成されている。ところが、本論で「母屋、主屋」の用語を使わないのは、建築大辞典第二版(1993、影国社)によると「住宅などが同じ敷地の中で別々の棟として配置されている場合、その中心的な建物の称しているもの」であり、本論での研究対象となるのは一つの棟で構成された農家を対象としたからである。従って、本研究では両国にとって「附属棟」に対する用語として「すまい棟」の用語を使うことにする。

3) 本論文の定義によると、両国にとって農作業の空間は日本の場合内部空間で韓国の場合外部空間で行うことになり、この農作業空間の構成は両国の大きな相違の一つである。



<図1> 韓国の一般的な農家の空間構成 (中部地方)

*「朱南哲 (1994) 韓国住宅建築, p80」参考に作図。一般的な農家の内部空間 (住まい棟) にはプオク (炊事場)、マル、バン (房、部屋) で、外部空間としてはマダン (ニワ) 附属舎 (倉庫、畜舎等)、便所、ジャンドックデ (醬・台)、煙突などで構成されている。



<写真1> 韓国農家の附属舎 (安東)

*「住まい棟」と離れて別棟に造られた附属舎である。左の間には杵米を脱穀する農具が置いてある。

3) 生活の分類

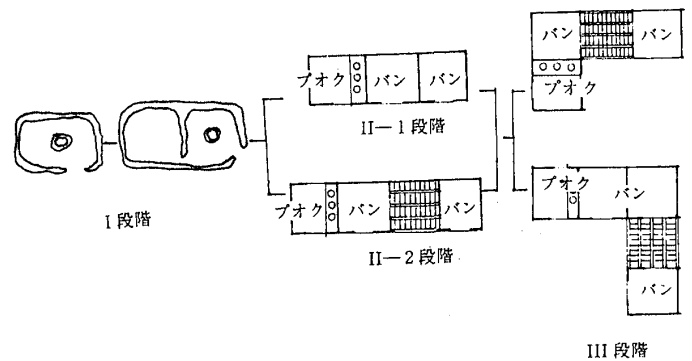
住空間に対応する住生活は日常生活の範囲に絞って考察を行った。日常生活は農業と密接な関係がある収穫物の乾燥、貯蔵などの農作業が行われる生産生活 (農作業生活) と就寝、日常的接客、家族団欒、食事、衛生生活などのような家族構成員が家庭を維持するための活動である家庭生活、家庭生活を維持するために従う家事生活と分類した。

3. 考察

1) 韓国農家の発展過程の考察⁴⁾

4) 本研究は両国の農家の空間構成に対する系譜を実証的に説明す

韓国の伝統農家は一室で間切りがない竪穴住居から食・寝の分離のためのプオク (炊事場) とバン (部屋、房) の二つの室と分離された。これは、さらに地域的な自然環境の差によって二つの農家類型を成すことになった。一つは北方部域から発生した農家型としてオンドル (温突、床暖房) の構造が取り揃えていたバンとプオクで組み立てていたものであった。もう一つは南部地域から発生した農家型として高床構造であるマル (大庁マル) やプオク、またオンドル構造ではないバンで組み立てたものであった。



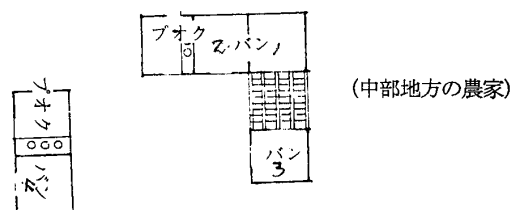
<図2> 韓国農家の定型形成過程の系統図

*朱南哲 (1990)、韓国住宅建築, p86」参考に作図。韓国農家の定型はオンドルやマル構造の結合を基本としている。農家の原型である竪穴住宅は北部地方で発生したオンドル構造である農家型 (II-1) と南部地方から発生したマル構造がある農家型 (II-2) と分けられて発展してきた。またこれはオンドルとマル構造が結合、発展し、農家の定型 (III) を形成することになった。

ところが、長い間に経て相反の構造であるオンドルとマルが結合・適応され、プオク、バン、マルを基本要素としていくつかのバンが追加される形態に発展してきた。アンパン (内房)、コンノバン (越房)、サランバン (舎廊房) と呼ばれるいくつかのバン⁵⁾ は家族内の長・幼、男・女の区別などを基本にしてしつの使用人が決められた。アンパンは家の中心空間として年長者の起居になったが規模が大きい場合はサランバン (舎廊房) が造られ、家内の男性が起居する場所とな

る立場ではないので、文献による系統的な考察を行った。

5) 次の絵から見ると大部分の場合、バン1はアンパン (内房)、バン2はプオクバン (炊事隣房)、バン3はコンノバン (越房)、バン4はサランバン (舎廊房) となる。



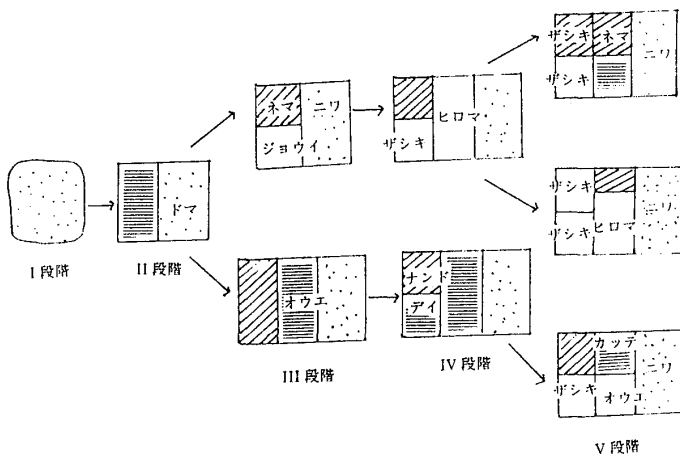
(中部地方の農家)

った。この場合、アンバンは女性が使うことになる。またコンノバン（越房）は子供あるいは結婚した子などの起居であった。このことは性別および長幼の序を重要とした儒教⁶⁾の生活規範が住居における空間領域として現れたと考えられる。

従って、古代から朝鮮時代まで至って定着された韓国の農家の定型はオンドルとマルがともに揃えている型を基本として幾つのバン、マル、プオクで組み立てられた型に在る。

2) 日本農家の発展過程の考察

日本の農家は原形として考えられる（太田 1997）竪穴住居（一室）から炊事場の分離、また農耕時代になって物を蓄えるための場所は住居部分から分化した。



＜図3＞日本農家の定型形成過程の系統図

*「吉阪陸正（1992）住居学、相模書房、p94」参考に作図。生活の収容のための間切りによって空間を形成・発展してきた日本の農家に対して本論では四間切りを定型とした。住居と作業空間が分離され（II）、さらに住居（床）の部分はネマ、ナンドのような独立した部分を成してきた（III）。貴族生活からのザシキは導入され（IV）、田字形または食い違い型の四間切りを成してきた（定型）。

つまり、生活の発展に伴って空間の分化が行われたと考えられる。長い間、農家の人々の生活空間は二つから成り立っていた。その一つは通常間切りがないが床面が二つに分けられた土間と板間であって、食事と農作業のための広い空間であった。普通、土間の部分をニワ、板敷の部分をデイ、オウエ、オイエ、ジョーイなどと呼んでいる。もう一つの空間は寝室に充てられる部分や家具などを置く場所でネマ、ヘヤ、ナンド、チョウダイと呼ばれ、独立し囲われた部分を成している（吉阪,1985）。各室は地方によって様々の称がある。

6) 高麗末から生き始めた儒教は1392年にこれを国家理念として持ち出した朝鮮が建国され、朝鮮王朝500年間を通じて絶対的であり、朝鮮時代の社会の基本単位は個人ではなく家族であり、家父長的な家族（大家族制度であった）。

ところが、武家にあった接客方式の影響は農家にも及んで⁷⁾、ザシキ、ツギノマ、ナカノマなどが出来た。この接客のための専用室の構成は住居を格式あるいは接客の場として考える意識の強さを示していると考えられる。これは各地で自然の風土や地域性を考慮した特徴ある住まいが生まれ、地域差はあるとしても近世に至って四間取り型⁸⁾が全国的に現れることになった。本論文ではこれを日本農家の定型とする。

3) 両国の伝統農家における発展過程の特性

韓国の農家の最たる特性はオンドルとマルの構造が結合され、一つの住宅内に相反する気候の室が共存していることであった。また、室の構成は性別及び家族の階層秩序を基本にして形成・発展されてきたことが判る。

ところが、日本の農家は住居生活の発展に伴って農作業空間の分離、寝る空間の確保、また家族生活行為の場から接客生活行為の場を分するという仕組みで空間が発展してきたということが判る。これは日本の場合は「生活の収容」を主要要素とし空間を組み造られた傾向が現れたが韓国の場合は「気候の適応」と「儒教の生活規範」を受け入れることによって空間が構成されたと考えられる。さらに、このことは両国の室の名称からも考えられる。韓国の場合はサランバン（舎廊房）、アンバン（内房）、コンノバン（越房）はバンを使用する人の性別または家内の秩序を意味するが日本の場合はネマ、ナンド、ザシキ、ナカノマなどのように室が主に持った専用の機能によって称している。

4) 両国の農家の構造的な空間特性

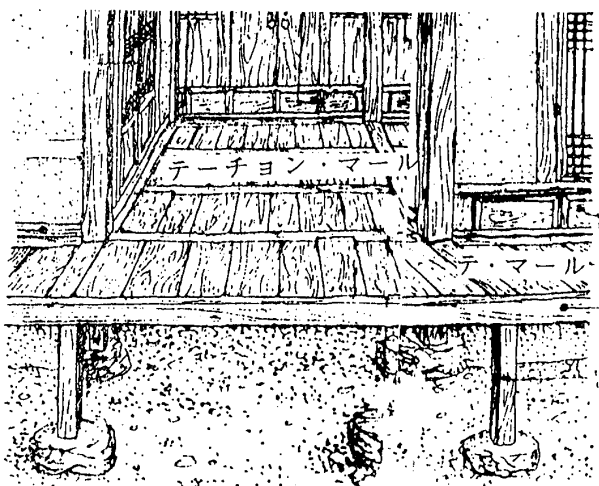
韓国の農家は空間構成の結合的方式であると考えられる。これは一般的に空間の非連続性また閉鎖性⁹⁾を基調にしている。また、このような空間構成においては「壁」が重要な役割をはたしている。韓国農家のプオクやバンのような空間は「土壁」で造られて、空間の非連続性を現している。しかし、これは高床構造であるマルによって部分的な空間の連続性を持たせるこ

7) 太田博太郎（1997）図説日本住宅史、影国社、東京、57-60、「農家にザシキは特殊の場合の儀礼用の部屋となっている。これは明らかに近世頭において確立した書院造りの影響下に発生したと思われる。」

8) 建築大辞典（1993 9、影国社、東京によると「4室を田の字形または食い違い型などの2室を2列に並べる平面形式の総称、同じ4室配置でも横に1列に並べるものは称さない、全国的に見られるが成立の時期やその源流の形式は地方によって異なる」本論の定型になった「四間取り型」は整形や食い違い型の四間取り型を含めた。

9) 構造的観点からの開放性や閉鎖性に関する論議は「窓は先に閉じていることが前提で閉じられた壁に穴が空けられた開口部と解釈でき、襖そこから光や景色情報は入ってくるが人の出入りは出来ないものと考えられる。襖や戸は人や物の出入りを可能とするものであり、

とになったと考えられる。デーチョンマル¹⁰⁾はバンに面して壁は大部分障子(開き戸あるいは引き戸)で構成されてバンが持った構造的な閉鎖性を弱化させて住居空間の連続性を強化させ、また室の転用性を高める役割を果たしている。



〈図4〉韓国農家の一般的なマル構造

*「申榮勳(1991)、韓国伝統民家の原型研究、p398」参考で作図。これはテ・マルやデーチョンマルが共存している。マルは非常に開放的(構造的、生活的)であり、特に夏期には涼しい居所として使用されている。



〈写真2〉韓国農家のテ・マルの形態(安東)

*退間の部分に造られたテ・マルは閉鎖的な空間であるバン(房、部屋)とバンを連結する通路の役割を果たしている。

ところが、日本の農家の場合、分割的な空間構成の方式になっている。床の部分の間切りは襖、欄間、戸によって行い、これは部屋との間を強固に分割するよう

前提としては開放される」ことを前提条件とした。

¹⁰⁾ 韓国の場合、マル構造はおおよそ二つの種類がある。一つは〈絵1〉のようにバンらが並んで一つの室(板房)としてデーチョンマルと呼ばれるものである。〈絵2〉の場合は住宅の軒下の縁側の退間の部分に作られたテ・マルと呼ばれるものであり、閉鎖的バンとバンを連結する通路の役割を果たしている。

なものではなく、空間的な連続性を基調にする開放的な空間構成になった。

5) 両国農家の生活対応的な空間構成

(1) 生活動線

韓国農家の場合、「附属舎」と「住まい棟」とは概ね分離されて建てられている。農器具などを保管する倉庫系列、畜舎系列などの附属舎がマダンにあるので、大部分の農作業はマダンで行われたと思われる。さらに、マダンにはジャンドックデ(醬・台)と呼ばれる醤油類、キムチなどを保管する・置く台〈写真〉と井戸などがあり、炊事また調理の動線は自然にブオクからマダンへの拡張されていく。



〈写真3〉韓国農家のジャンドックデ(醬・台)

ところが、日本農家の場合、土間の部分には肥料小屋、物置、馬屋、風呂、釜、便所などがあって、調理、排便、農作業はここで行われた。また、接客、就寝、収納、家族団欒などの場合は床の部分で行われ、大部分の日常的な生活は土間と床の部分で行う韓国より生活動線が内部空間に短縮されたことが判る。従って、生活動線に対しては韓国の場合外部拡張的な傾向があり、日本の場合は内部空間の指向的な傾向がみられる。

(2) 室の転用性や固定性

韓国はオンドルの燃焼室と食器それに炊事、調理などの家事生活が行われる炊事場の場合、一つの閉鎖的な室として機能が固定されている。ところがアンバン(内房)の場合は寝る空間であり、冬期に接客・家族団欒・食事生活などに使用され、転用性が強調された室でもある。つまり、アンバンの場合は閉鎖的な空間ではあるが、生活による空間の転用が活発になっていた。ところが、夏期では大部分アンバンで行われた日常生活がマルで行うことになり、一般的な開放的空間がもった室の転用性が現れる。このことは韓国の農家にとって室の構造的な閉鎖性・開放性という意味は

室の機能を転用・固定することではなく、これより気候に適用する空間構成になっていたことが考えられる。これは韓国の住宅は冬の生活に適したオンドルと夏の生活に適するマル構造が共存し、季節による適当な室の選択が可能だったからと思われる。一方、日本の場合は韓国と比べると日本の方が室の専用性（固定性）が強調されたと考えられる。これは分割的空間がもっている室の開放性、連続性に対して生活の収容させる空間を形成するためには室の厳格な機能区分は必要であったからだと考えられる。そこで特別に座敷、納戸、寝間のような専用性が強調されて空間が形成されたと思われる。

4. 結論

本研究は韓国と日本の伝統農家の空間構成に対する独自性を探するのが目的である。研究内容は両国の農家の定型に至るまでの発展過程を系統的に考察した上で、住生活と住空間の対応による構造的空間と生活対応的空間の特性を分析した。両国農家の発展過程の考察によると、日本の場合は「生活に収容」することを重要な要素として空間が構成されてきたと考えられる。一方、韓国の場合には「積極的な気候の適応」と「儒教の生活規範の収容」によって空間が組み立てられてきたことが考えられる。

さらに、両国の空間構成の特性は韓国農家は結合的方法で非連続性を基調にしていたが、マルによる部分的空間の連続性を持たせて室の転用性を高めることになっている。また、空間利用に対しての空間の特性は韓国の場合「外部（マダン）拡張的」な傾向を現している。従って構造的閉鎖性や開放性が混在しているが全体的には空間の利用は外部拡張的、つまり、開放的な住生活を営む空間利用の特性が見られる。

一方、日本の場合は空間構成は分割的な方式であり、区切りは空間の連続性を基調にしたが室の「専用性」が強調された住生活が行われたと思われる。これは構造的な開放性を持つまま、「生活を収容」する空間の形成を果たすためには厳格に機能が文化された室が必要だったからと考えられる。また、空間利用は韓国に比べると「内部空間の集約指向的」な傾向が現れ、従って日本の場合、構造的開放性は持っているが空間の利用は内部集約的つまり、外部に対して閉鎖的住生活が営まれる特性が見られる。

参考文献

1. 朴庚玉、劉福姫〔1993〕住民自由意志による新築農家住宅の建築的な特性及び生活に関する研究、大韓建築学会論文集 9、73-84
2. 朱南哲（1994）、韓国住宅建築、一志社、ソウル
3. 金善・（1979）、韓国住宅暖房の史的考察—温突を中心として—、大韓建築学会誌 23、17-22
4. 申榮勳（1991）、韓国伝統民家の原型研究、説話堂美術選書 37、ソウル
5. 劉福姫、田中辰明（1998）韓国住宅の床暖房に関する考察—オンドル構造の発展過程に関する考察—、空気調和・衛生工学学術講演会講演論文集、1445-1448
6. 吉阪陸正（1992）、住居学、相模書房、東京、86-98
1. 朴庚玉、劉福姫〔1993〕住民自由意志による新築農家住宅の建築的な特性及び生活に関する研究